

## 長州藩本陣宿営の地/親王寺

芦屋市打出町3

- ▶ 親王寺は平城天皇の第一皇子である阿保親王(あほしんのう)の邸跡に建てられたお寺です。長州藩主毛利氏は阿保親王の子孫にあたり、参勤交代の際、参詣をしていました。討幕の密勅を得た長州藩は、藩兵1200名を軍艦7隻で上京させ、慶応3年11月29日夜打出の浜に到着します。兵は上陸をし、親王寺を本陣としました。翌日には、兵を東に進めますが、振武隊だけこの寺にとどまりました。門を入っていくと右側に手水鉢があり、その手水鉢には一文字三ツ星の紋がありました。一文字三ツ星の紋はお寺の紋でもあり、長州藩主毛利氏の家紋でもあります。



## 専 稱 寺

神戸市中央区南本町通4-5

- ▶ 昨年の神戸史跡探訪Vol.1にご案内する予定でしたが、時間の関係で割愛となったところですので、今回改めてご紹介いたします。

専稱寺は江戸時代、大坂の北鍋屋町にあった浄土真宗の寺です。北鍋屋町は現在の大阪府中央区淡路町3丁目2-13、14に該当します。

勝 海舟は大坂での寓居先として専稱寺を使用していました。

以下、昨年のイベントテキストで紹介した文をそのまま引用します。

## 浄土真宗 専稱寺

順正寺の次の勝 海舟寓居先は、当時の北鍋屋町にあった「浄土真宗 専稱寺」です。

北鍋屋町はその後の町名変更で、淡路町3丁目になり、区画整理などで更に変更し、現在の淡路町2丁目5～6、同3丁目1～2辺りが、北鍋屋町に該当します。

専稱寺があった場所の確証が取れる資料はなかったのですが、大阪市史を研究されているある先生に助言をいただいたところ、「北鍋屋町水帳」(安政3年作成)と「大阪地籍地図」(明治44年作成の大阪市地図)の2つの資料を照らして判断すると、現在の淡路町3丁目2-13(スワン大阪第一ビル)及び、2-14(ノリタケビル) 辺りだという結論に至りました。

「北鍋屋町水帳」は北鍋屋町にあった全ての建物の横幅・奥行き寸法、及び持ち主が記載されており、それらの建物一つ一つの寸法と地図を見比べますと、この場所だということになります。



大阪市中央区にある勝 海舟寓居(専稱寺)跡

「専稱寺」は、「東区史」において北鍋屋町にあったことが記載されています。また、専稱寺は神戸市葺合区吾妻町に移転したことも確認することができました。葺合区は今の神戸市中央区で、ちょうど葺合警察署がある付近となります。2002年2月、現在の専稱寺を訪れてみました。

ご住職さんの話によりますと、専稱寺と勝 海舟は関連があり、それを裏付ける資料もかつては残っていました。その資料の中には、坂本龍馬が専稱寺でお世話になった記念に残した絵のようなものもあったそうです。しかし、昭和20年の空襲による戦災で、貴重な資料は全て焼失してしまいました。

「専稱寺」は、浄土真宗本派本願寺門下で、慶長13年(1608)12月28日、祐性という僧が、北鍋屋町にて開山します。明治31年10月に、同じ大阪市内で旧東区中本大字森(現、中央区森之宮中央)に移転します。明治33年9月3日には、神戸市葺合区吾妻町(現、葺合警察署付近)に移転します。戦災により更に、現在の場所である中央区南本町通4丁目5に移転し、今日に至ります。勝 海舟は文久3年3月より9月24日までの約半年間、大坂の寓居先である専稱寺にて海舟の私塾である海軍塾を開いていました。その後、神戸海軍操練所開設に向け、海軍塾も神戸へ移転しています。大坂海軍塾だった専稱寺の現在の場所と、神戸海軍操練所ならびに神戸海軍塾(勝塾)の跡地との距離が、目と鼻の先というのも不思議なものを感じます。



現在の専稱寺

#### <勝 海舟・西郷吉之助の会見>

慶応4年(1868)3月13日・14日。江戸薩摩藩邸にて行われた幕府代表勝 海舟と新政府代表 薩摩藩西郷吉之助(後の隆盛)による江戸無血開城を決めた歴史的な会見は余りにも有名です。

しかし、元治元年(1864)9月11日に、この両者が大坂で会見したことも有名です。

「海舟日記」によると9月9日に

『陸路大坂へ帰る。』

とあり、神戸から陸路で大坂の旅宿である「専稱寺」に入りました。

そして9月11日に

『薩人 大島吉之助(西郷吉之助)、吉井中助(幸輔)、越人 青山小三郎、来訪。云う、征長の御議紛々、決せず、関東御混雑、実に策の行わるべき無し。邦人紛擾再生せんか。如何して可ならむやと云う。今、天下危急日々相迫り、一人も実意邦家に尽す者なし。上下大抵私營、小節、又、嫌忌を避くるのみ。かくの如くにて如何ぞ互解せざらん哉云々。』

とあり、西郷吉之助が当時使用の「大島吉之助」という名で、勝 海舟を訪ねた事が確認されます。

「氷川清話」には

『おれが初めて西郷に会ったのは「元治元年九月十一日」兵庫開港延期の談判委員を仰せつけられるために、おれが召されて京都に入る途中に、大阪の旅館であった。そのとき西郷はお留守居格だったが、くつわの紋のついた黒縮緬の羽織を着て、なかなか立派な風采だったよ。西郷は、兵庫開港延期のことを、よほど重大な問題だと思って、ずいぶん心配していたようだったが、しきりにおれにその処置法を聞かせよというわい。(途中省略)彼の問うに任せて、おれは幕府今日の事情をいっさい談じて聞かせた。』

(以下省略)』とあります。

2回目の流刑を終えた薩摩藩の西郷吉之助は、元治元年(1864)3月から藩務に復帰し、藩命により上京します。

西郷吉之助は事前に訪問希望を手紙に認め、勝海舟に了承を得た上で、同年9月11日、旅宿である専稱寺を訪れました。

「海舟日記」の9月11日に

『豊後殿御旅館へ参上。聞く。京都にて薩藩より建議あり、その言は防長二州は半国を以て禁裡の御物成とし、半ば征討の諸侯へ下されべし。(以下省略)』

とあり、勝海舟は豊後殿(老中 阿部豊後守正外)を訪ねています。西郷と勝は阿部正外の寓居先で会見したということも考えられなくもないのですが、老中の寓居先での会見を、西郷が事前に約束するとは考えられないので、その可能性は低いと思われます。

西郷吉之助は、「蛤御門の変後の長州問題」「兵庫開港延期問題」を詰問するために訪問します。

また更に、「長州の次の標的は薩摩ではないか」という幕府の腹を探るため、勝海舟を打ちたたくつもりで乗り込んだようです。この会見後、西郷は同藩の大久保一蔵に次のような手紙を送っています。

『勝氏へ初て面会仕り候処、実に驚き入り候ふ人物にて、最初打ち叩くつもりにて、差し越し候ところ、頓と頭を下げ申し候。どれだけか智略の有るやら知れぬ塩梅に見受け申し候。先ず英雄肌合いの人にて佐久間より事の出来候儀は一層も越し候はん。学問と見識におひては佐久間抜群の事に御座候得共、現時に臨み候ては此勝先生と、ひどくほれ申し候。』(この手紙は明治20年ごろ、吉井友実により発見)

また、「海舟余波」(巖本善治 編)では

『西郷に初めて会見せられし時の事を聞きかけしにイヤ、大坂であったよ。一所に来たものは、ソウサ、誰であったか。一人ではなかった、忘れてしまった。(途中省略)何でも、大久保[利通]の方であったそうナ。此方では、少しも知らなかったが、ソナ手紙があるということだ。』

と記されています。

この会談は、お互いの人物の大きさを認め合い、「江戸城無血開城」という平和的解決を実現させるための大きな一因となるものでした。



勝海舟



西郷吉之助



現在の専稱寺

